

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 16号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十五年四月
第十六号

< 2013年 4月 >

古賀 順子

ノートルダム寺院の鐘

Noël au balcon, Pâques au tison (ノエル
オ バルコン、パック オ ティゾン)

「クリスマスが暖かい冬は、復活祭に寒くなる」というフランスの諺通り、4月に入ってもパリは連日冬の気温が続きました。昨年12月パリの平均気温は6℃(イル・ド・フランス/ブルジェ気象観測所)、今年3月は4℃(最高平均8℃/最低平均1℃)。春分の日を過ぎて訪れる復活祭も、今年は冷たい風が吹きました。復活祭(フランス語でパック)は移動祝日です。春分の日(3月20日)後、最初の満月に続く日曜日が復活祭です。今年は3月27日が満月、3月31日が復活祭でした。

イエス・キリストは、金曜日に十字架にかけられて死にますが、三日目に復活します。パリのノートルダム寺院でも、金曜日からはキリストの死を弔うミサから復活を祝うミサが夜中も続きます。その鐘の音は、セーヌ河を越えて5区の我が家まで響いてきます。新しい音色です。今年建立850周年を祝うノートルダム寺院ですが、メインの記念プロジェクトとして、「9つの鐘の鑄造」が実現しました。

ノートルダム寺院正面左が北塔、セーヌ河に近い右が南塔です。南塔にエマニュエル(ファの音)とマリー(ソ)と名付けられた大鐘が、北塔に大きさが異なる8つの鐘(大きい順にガブリエル(ラ) / 受胎告知の大天使、アンヌ=ジュヌヴィエーヴ(シ) / 聖母マリアの母とパリ市の守護聖人、ドニ(ド)、マルセル(レ)、エチエンヌ(ミ)、ブノワ=ジョゼフ(ファ)、モーリス(ソ)、ジャン=マリー(ラ)の命名)が掛けられました。一番大きなエマニュエルは、重さ13トン、ルイ14世が1680年寄進しまし

た。第二次世界大戦のパリ解放を祝してドゴール大統領を迎えたのもエマニュエルでした。そのエマニュエルを除く9つの鐘が今回鑄造され、資料をもとに1789年フランス革命時の音色に生まれ変わりました。

19世紀のノートルダム寺院は悲惨な状態で、修復工事を必要としていました。1831年ピクトール・ユゴーの小説「ノートルダム・ド・パリ」(大聖堂の鐘を撞くせむし男カジモド)が出版されると、大聖堂の修復熱も高まり、小説家で歴史記念物監督官プロスペル・メリメの推奨により、建築家ヴィオレ・ル・デュックが修復に着手します。ヴィオレ・ル・デュック時代1856年北塔に4つの鐘が鑄造されましたが、金属の質が悪く、互いの共鳴も悪く、ベースとなるエマニュエルとは不協和音が生じていました。300歳を越えて、国の文化財になっているエマニュエルの負担を軽くするために鑄造されたのがマリーで、今後はマリーと8つの鐘が日々のお務め、エマニュエルはクリスマスや復活祭など、限られた機会にしか聴けなくなります。

青銅でできた12使途と4人の福音者を頂く尖塔(高さ93m)は、ヴィオレ・ル・デュックが修復時に建て直した部分です。彼は聖人トマの姿を借りて、大聖堂を見守っています。8つの鐘を鑄造したノルマンディーの会社は、「54mの高さまで釣り上げる方法は、今も昔も同じです。違うのは、昔は人力で、今は電力だというだけです。鑄造に込める思いは変わりません」と述べています。いつの時代にも、大聖堂の歴史と技術を守りながら近代化が行なわれ、9つの新しい鐘は、これから何世紀にも渡り、大聖堂の声となります。ノートルダム寺院が存在する限り、鐘音の記憶も大切に伝える「見えない財産」として受継がれていくことでしょう。